

最優秀賞

母と娘の伝言ゲーム

愛知県 藤本 有希那

「シー*ルト*て。」「舌べらとつて？」

なんでそうなるのと、ゲラゲラ娘が笑い出す。ああ残念、今日もゲームは私の負けみたいだ。

私は障害特性上、聴覚情報の処理が苦手だ。静かな場所でも一対一ならまだしも、いくつかの音がある環境で必要な音だけ聞き分け、何と言われたか理解するのが難しいのである。そのため会話コミュニケーションは苦手だ。完了するまでに時間がかり、いら立ち、相手も自分も伝わらない事に疲れてしまうからだ。会社や地域で、大事なことは静かな場所に移動して伝えて貰うか、メモに書いて貰っている。しかし、雑談レベルの話にまで配慮を求めることはできない。相手から発せられた音に、わかつたふりをして相槌をうつ毎日。意思疎通はできてもコミュニケーションが取れないことは、私を孤独な気分になせ、次第にコミュニケーションから遠ざけていった。

ある日のこと、娘がゲームを提案してきた。伝言ゲームだ。できるわけがないと拗ねていると、娘は笑いながら言った。

「このゲームね、間違つて聞こえて変な風になつちゃう所が面白いの。だから間違えて聞こえてもいいんだよ。」

かかは才能あると思う、なんて無邪気に言う娘がおかしくて、

私はゲームをやってみることにした。結果は惨敗。しかし、生み出された聞き間違いは私たちを笑顔にさせ、聞こえない罪悪感をさっぱり拭い去ってくれた。

「いつものお喋りも、このゲームだと思えばいいんだよ。聞こえなかった所は私が伝言してあげる。間違つてると思つても、そのまま言つたら、皆笑つてくれるかもしれないよ。」

正しく聞きとる事がコミュニケーションの条件ではない。気が楽になった。おかげで今、私は娘が繋いでくれる音を拾いながら、周りの声を聴いている。娘がかけてくれた言葉のかけ橋に感謝しながら、周り繋がり、私はこれからもコミュニケーションを楽しむ。心と心でつながるために。

(審査評) 困難な環境下を子どもの何気ない提案で前向きに乗り越えようとする姿勢が力強い。全ての関係とは上の世代の大人から下の世代の子どもへと一方的に繋いでいくものではなく、双方によって結びつき、強固になっていくものと再認識した。文章も柔らかく、家庭内の雰囲気や娘さんとご本人、周りを取り囲む家族、それぞれの優しさが伝わってきて素晴らしい。

佐藤 暁哉